

成蹊會誌

第三號

雜 念

成蹊實務學校
同窓會委員長 吉田松太郎

今度僕が大類先輩の後をついで實務學校同窓會の委員長となつたので何か挨拶の言葉を紙上で述べるようにと、谷岡幹事から再三依頼された。だが、いざペンをとつてみると少しも書けない。考えがまとまらないのである。だから頭に浮んだことをそのまま言わせてもらいたい。第二次大戦で世界中が一變した。敗戦國の日本では變り方が特にひどい。制度も道徳も、道徳などは戦前の目で見ても逆立ちしている。或は逆立ちしていたものが本來の姿に歸つたのかも知れない。われわれには判断がむづかしい。

餘事はさておき、成蹊學園そのものもまた同窓會も變つた。學園は同窓會の援助を求めてきた。ばらばらであつた同窓會も一つにまとまつた。いま、成蹊學園の歴史を回顧してみる。成蹊國、實務學校、中學校、小學校、女學校、實業專門學校、高等學校、大學があり、またあつた。その中で女學校は分離され、實務と實業專門の二校は廢止された。だが兩校ともに發展の解消をしたのではな。残つたのは小學、中學、高校、大學である、まさに形式的には大發展である。

會員の立場だ。庶民の學校は亡びて貴族や金持の學校は榮えた。現在の學園の存在はわれわれの關知しないところである。そのように考える人もあろう。それも考え方の一つである。成蹊學園は中村春二先生の精神と岩崎小彌太氏を中心とする三菱の精神と物質で出来たのである。お互に學校こそ異なれ成蹊教育を受けて来たのだ。學窓を出ても二十年から三十年になる。相當なる社會的地位を得ている者が多い。また、敗戦で貴族は庶民の列に落ちた。金持も入替つて質が違つた。だから成蹊學園を出た者は一つに團結して、相互の向上を圖ると同時に學園の發展に努めようではないか。このように考えた人もあろう。これもまた考えかたの一つである。どちらの考え方を採らうとそれは各人の自由だ。だが時代は變つたのである。お互に氣持を廣くして成蹊人として團結した交際したいものである。そして學園團結の中心としたいものである。

次に學園の教育方針である。池袋時代即ち中村先生時代の教育精神は復歸しつつあるそうだが、教育については門外漢ではあるが、池袋で教育を受けた者には嬉しいことである。恩師の慈顔が浮んで来るやうな氣がある。だが油袋は昔のやうな聖地ではない。麥畑はバラツクの海と化した。東京では屈指の盛り場である。非常な變化が必要であらう。

村土委員長の九州轉任により不圖學園の前途多難な際大任を御受けする事になつたが何卒各位の御協力を得ていざさかなりとも學園の爲に盡して度く考へて居る。

未だ學園の事情を詳にしないがいざ、か感想を述べさせて頂き各位の御叱正を仰ぎ度い。

學園が成蹊國に始り實務、中學、小學、専門、女學、高等各校を経て大學に至つた経路を考へる時全く感慨に堪へない。

確に外面上、形式上、成蹊は發展途上を進んで居るが内容的に果して何んなるものだろうか。

中村先生の烈々たる氣魄の下に教育された者はたとへ在學當時多少の不滿があつたにせよ卒業後母校を慕ひ先生の教育に感謝して居る者が大部分だと思ふ。

聞く處によれば現在の成蹊では他校へ入學の爲の腰掛に席を置く者もあると云う。

現在の生徒が卒業後果して同じ様な感慨で母校を憶ひ慕うだろうか。明治維新を境に黨制度に變り全國に小、中學校を設け文部省下一國滔々として劃一教育に走り校舎、生徒の數の大きを以て文運の盛大を誇つた時新教育の烽火を擧げられたのは中村先生である。

各校が昇格問題に熱中するのを教育は學校の形式的な格の變更で向上するものでないとのを笑殺し得た當時の學園當局者だつた。

私は徒らに昔の成蹊にかへれと云う者ではない、時代が變れば教育方針も變るだらう。中村先生の教育も

思い出すまゝ

成蹊高等學校
同窓會委員長 三好道矢

天才教育、凡才教育と變り或る時は朝令暮改の譏りさへあつた。然し乍ら先生の生徒を教育する師としての信念確信は微動だにしなかつた。現下學園最大の關心事は學園校舎又は基金の大小、職員生徒の多少ではなく眞の教育振興にあると考へらる。

今にして改む可きを改める處が無ければ傳統無く特色無く唯徒らに生徒

丹羽成蹊會長の訪問をうけて

鶴岡にて 澁谷 光長

八月三日の正午過ぎであつた。私の店のデスクで晝食後の休憩をしていて、受付子が澁谷さんと呼ぶ。立つて店先きにくくと一人の中年の方が笑みを含んで名刺を出されたのを見と、それが丹羽さんであつた。何という趣味した私でしせう。名刺を見るまでもない其の人をちよつと思出せないとは。平あやまりにあやまつて、「さあどうぞ」と順接所に御案内したのであつた。

丹羽さんと最後にお會ひしたのはいつだつたか、とにかく中村先生の追悼會のあつた頃には度々お顔を見ていた譯であるが、私は元より小學校の平教員だつたから、しみじみとお話をかわす程の地位でもなかつた。それにも拘らず、この遠方の土地で寸暇のない時間を割かうて、わざわざ私を訪ねて下さるという事は一通りのことではない。お聞きすると店に來られる前に私の假寓にも足を運ばれたそうである。「成蹊なる哉あ成蹊なる哉」と深く心を打たれたことであつた。

これより先き村土正夫君から久しぶりの書信があつて卒業生諸君が理事職を作つて學園の運営にあつた

いることを報せられたが、今回丹羽さんから直接のお話して學園の近況がよく分り、小學校の校舎が己に建てられ、今新しい校舎の建築にかかつて居る、そして其の設計から工事の監督までも、現在東大の教授をしていられる卒業生がそれにあつて居ることなど、私は何よりも先づ中村先生の靈が之をみられて、どんなにか喜ばれて居ることと思つた。

一時中村先生のことを強調すると睨まれた時代などもあつたが、現在は卒業生が成蹊會から理事を出して先生の遺志を着々と實現され、又お話によれば先生の奥様の晩年が淋しくないようにと、そこまで心を配られて居るとのこと、私は「ああ」と深い喜びの聲をあげたのであつた。徳は孤ならずである。私はこの日家に歸つても心がほのぼのとし愉しかつた。こんな心の愉しさは歸郷以來未だかつて無かつたやうである。

しかしこの愉しさを私に與へて下された根底には、今も成蹊に残つて中村先生の學風を慕ひ、時には孤高とさへ見た香取先生の深いお察しがあつたのである。丹羽さんの鶴岡行きを聞いて是非私を訪ねてくれと

言われたと丹羽さんが語つて居られ又村上君が手紙を出す氣持になつたのも、同先生の語に依るとも書いてあつた。

心の力に「我は古人のおもてを見せれど古人の心に觸れつべし」とあつたが、香取先生は中村先生とは遂に地上に於ては一度も會われなかつた方であるが、私はいつも同先生の高志に敬服しているのである。

丹羽さんは誦茶をすすりながら、「私は今、親子二代成蹊にお世話になつていますよ」と、いよいよ明日の新成蹊を打立んとする心の底をちよつと見せられ、やがて時間が来たからと立去られた。

私は戦災を負ひ唯一人となつた病児の療養のため閉つて居る。歸郷當時食糧困難の時に二里先きの山端に語を作つて凌ぎ、日給五十圓の臨時職工の群れにも入つたが、今は僅かに知つた人の無難會社の厄介になつて居ます。國を去つて五十年、凛然と歸つて来た鶴岡は生れ故郷ではあるが、故人已に泉に歸してしまひ心を慰めてくれるのは時々舞込んでくる成蹊の昔の人々からの便りです。

（澁谷先生の御住所は、山形縣鶴岡市家中新町成一の二加藤様方、御勤め先は、鶴岡市下肴町兩羽無盡支店です）

三上和

成蹊會誌をお送り下さいまして、まことに有難うございました、云ひ知れぬ懐かしさに、夢中で、一氣に讀了いたしました。

私は明治四十四年の暮、その頃本郷の駒込富士見町にあつた、成蹊園にはじめて御厄介になつてから、成蹊の發展と共に、池袋に移り、吉祥

寺に轉じ、成蹊の生え抜きで、このまゝ一生を終り度いとも考へ、限らない愛着を持ち乍ら、昭和十七年秋農道實踐を志して、郷里に歸農するまで、實に三十三年の長い間、成蹊で育ち、成蹊で老ひ、創立當初からの、多くの學園出身者や、諸先生と親しんで來ましたので、成蹊は、第二の故郷であり、人生の大半を埋め盡した、懐しい、心の古里であります、今會誌を讀んで、その成蹊がこんなにも大きな變化をして居ることを詳しく知つて驚くと共に、成蹊會の活潑な動きに感激し、各校同窓委員の方々の、なみくならぬ同窓努力に敬服し、深く感謝いたします。

丹羽常務理事、三好、大倉兩氏の、理事就任も始めて知り、實に心強く感じました。

成蹊がますます、發展し、盛大な成長を送ります様、同窓理事の御活躍に期待し、尙背後に、成蹊會の諸強力が、一致協力、陰に陽に、一層強力な御支援をせられる事を信じ、三氏が十二分に御手帳を發揮せられる事と、教授團に、多數卒業生が加つて待つて、いよく、成蹊の傳統を維持發揚せられること、慶びにたへません。當地は都會を遠く離れた山村で、刺戟のない、感激の少ない生活環境、それ丈に靜かに平和に、土と心を耕しつゝ、愛農一路に精進する事が出來ました。戦時中も、直接戦場を身邊に受けず、一度B29が遙か東方の空を飛行雲を引きつゝ、通過するを、物珍らしく出て見た位な事で、その他には敵の飛行機すら見なかつたかわり、戦後の急轉換には、なかつた時代代役になつてしまひました大いに啓蒙していただき度いと切望いたします。

（三上先生の御住所は島根縣邑智郡高原村小下塾です）

「寸言集」より

成蹊大學講師 中屋 健一

「文藝春秋」から頼まれて五ヶ月ばかり、「寸言集」という社會批評とも随筆ともつかぬものを書いた。あゝいつた短文であつた内容のもの、本當は新聞に書くのなら樂なのであるが、月刊雜誌は原稿を書きから活字になるまで約一ヶ月もかかるので、題材にワクがあり、非常に書きにくい。しかし、讀者の反響は相當なもので、三人で書いて一人署名しないから一種の匿名批評であるにも拘らず、いろいろ意見を述べて來てくれる人がある。

今度、成蹊の教壇に立つことになつたのを機會に、何か「寸言集」まがいのことを書いてくれと谷岡君から依頼されたので一筆というわけだが、成蹊の若い學生に親しむのは本當はこれからの話であり、まだ「寸言集」のたねに於ては、早いと思ふ。だから成蹊のことには直接關係しないことにも多少筆が及ぶことになることは御容赦相成りたい。

私立大學のあり方ということについては、終戦後アメリカの教育がとり入れられて來るにつれて、あちらでは私立の方が官立より立派なものである。私立の方がより自由な教育ができるのだとか、いろいろ議論が耳に入るのである。それはある程度事實なのであるが、傾向としてはアメリカでは私立大學が衰退して州立が擡頭しつゝあるといつてもよい。それは一九二九年以後の大恐慌後次第に著しくなりつゝある傾向で、私立大學の經營困難といふことは、よほど特殊性がない限り、一般的なことなのである。授業料だけが高くて、設備や教授について大差ないとすると、誰が私立大

學に行くであろうか。成蹊に子弟を通わせている人たちは、官立の學校を維持するに必要な税金を支拂つて官立の學校に子弟を送る権利を持つて居る人なのであるが、あえてその權利を放棄して、更に成蹊へ授業料その他の費用を拂つて居るのである。だから、成蹊がよほど良い學校でない限り全く無意味なことといわねばならぬ。それならば、成蹊は他の官立に比べて一體どこが好いのかと考へて見よう。この質問に對しては成蹊に關係し成蹊が好きなら何と云ふか。それらはほとんど全部無理をした答へであり、こつつけにすぎない。昔の成蹊ならば、成蹊に求めることがいかに困難であるかは誰でも知つて居ることなのである。

市民として當然持つて居る權利を放棄してまで成蹊に子弟を通わせて居る父兄を始め教職員、卒業生その他の關係者が、一致して成蹊が私立としてこれだけの特殊性を持ち、それ故に社會的な存在價值があるのだれ、故に社会的な存在價值があるのだれ、はつきり言ひ切ることが出来るまでは、決して成蹊は昔日の成蹊とはならぬであらう。又、新しい日本のために何らの貢獻も期待し得ないであらう。

言葉というものはむづかしいものである。殊に學問の學問を丸のみにする傾向の強いわが國では、外國語を直譯する結果、おおよそニュアンスの異なる概念に使用され、混亂を招くことが多い。その上同じ日本語に譯された言葉でもその原語が使われている國が異なつて居ることによつて、ちがつた意味を持ち、われわれを混亂させて居る。前の場合は、大いに見當がつくから注意しておれば

その判斷を誤ることはないが、後者の場合の一例をあげると「帝國主義」といふ言葉がさうである。日本の新聞には「ソ連帝國主義」とか「アメリカ帝國主義」とか出て居るが、讀者はどちらが「帝國主義」なのか見當がつかない。それはその密で「ソ連帝國主義」とアメリカ人が使つて居るのは、アメリカでは帝國主義は單に領土の擴張乃至は勢力範圍の擴大という意味にしか考へて居ないからである。現在のソ連のやり方を帝國主義といへば、レーニンの帝國主義の定義にしたがつて居るわが國では理解できないのも無理はない。ソ連がアメリカに對して使つて居る「帝國主義」はまさにその意味である。こういう事實はアメリカの學問がわ國に次第に入つてくるにつれて益々著しくなつてくると思ふ。しかし、今までヨーロッパの學問の直輸入をやつて來た日本人が、にわかにはアメリカに換へては困難だし、ヨーロッパの學問の直輸入だけでもいやになつて居るのに、その上アメリカのもつてはたまつたものではない。

われわれが努力しなければならぬのは、直輸入から一旦も早く脱して、日本獨自のものを作らつと築き上げることである。私はせめて成蹊はそのような學問の根源地になつて居ると思つて居る。外國のものはいかに良くても、良いと信ぜられて居るもの。所詮は日本のものにはなり得ない。いかにしてその良きものを消化して、われわれの生活の向上に役立てるかが問題なのである。

（高校第三回文科卒）

★ ★ ★